

彙 報

平成26年度広島大学日本語教育学講座言語・文化・教育研究会，特別講演会

◎第12回大会（平成26年6月5日）

○講 演

コースデザインの過程を読み解く — ひろしま国際センターでの実践から —

犬飼 康弘 先生（ひろしま国際センター）

【講演要旨】

本報告では、地域国際交流協会である（公財）ひろしま国際センターで実践したコースデザイン過程を、計画（Plan）、実施（Do）、評価（Check）、改善（Action）という、いわゆるPDCAサイクルを通して読み解くことを試みた。具体的には、留学生を対象としたアカデミック日本語プログラム、海外で日本語学習をしている大学生を対象とした短期訪日プログラム等を事例とした。いずれの事例にも、時間数、期間、予算など様々な制約がある。その中で、持続的なコース改善をしていくためには、とりわけ計画段階で学習者の将来を見据えた到達目標の設定が重要である。また、学習者の「学び」を重視する観点から、学習者自身に「ことば」や「文化」を発見させ、視野の拡大や内省の深化を促す必要があることに触れた。最後に、このような学習者の「学び」に様々な社会資源が活用される一方で、それらの社会資源が学習者（＝直接利益を得る第一受益者）のための単なるリソースと見なされがちであることを課題として挙げ、学習者と接する社会資源を第二・第三の受益者と位置付け、互惠関係を構築しつつ、日本語教育の社会的意義を高めていく可能性について検討した。

○研究発表

【口頭発表】

蘇 振軍（博士課程前期2年）

第二言語と定式表現（Formulaic language）

趙 あきこ（博士課程後期2年）

日本語母語児の格助詞の習得

—動作主-被動者を標示するガ、ヲの理解に着眼して—

【ポスター発表】

尹 帥（博士課程後期3年）

視線から何がわかるか

—視線計測実験の方法と分析手法—

ジャ ブルブル（博士課程前期2年）・田村 彩香（博士課程前期2年）

多読教材を作成する

—英語多読教材と日本語多読教材の比較を通して—

朱 洪瑩（博士課程前期2年）

中国語を母語とする初・中・上級の日本語学習者における語彙・概念関係についての検討

—言語内・言語間ブライミング効果を通して—

谷口 愛保（博士課程前期2年）・川元 志織（博士課程前期2年）

日本語学習者用多読アイテム「よむよむ文庫」の分析

—「げんき辞書」を使用して—

◎特別講演会（平成26年6月20日）

個と社会を繋ぐ日本語教育： コンテンツベース授業「米国シカゴ日系人コース」を通して

近松 暢子 先生（米国：ディポール大学）

【講演要旨】

内容重視の言語教育として、近年コンテンツベース授業（CBI：Content Based Instruction）が米国大学レベルの日本語プログラムで注目されている。一つの学術テーマ（文学・歴史・倫理等）を選び、一学期を通してそのテーマを徹底的に日本語で議論・考察しながら日本語能力を伸ばすアプローチは「日本語を学ぶ」から「日本語で学ぶ」言語学習設定とも言われる。

本講演では米国中西部のシカゴに位置する大学で開講された日本語 CBI コース「シカゴ日系人史」を例に、地域社会との関わりを通して学習者の日本語学習の意義と学習者の役割を再考するため、以下の3つの学習活動例を紹介した。

- (1) 個人と社会をつなぐ「インタビュープロジェクト」：シカゴで活躍する日本人・日系人にインタビューし、人権・社会正義・アイデンティティに関する問題を提起し、解決に向けて提言（自分に何ができるのか）する。ハワイ・西海岸史を中心に研究される米国日系史にシカゴ及び個人史を持ち込むことで、学生が既知の歴史をよりクリティカルに分析し、自己と他の対話の中で更に理解を深め分析考察する言語学習活動。
- (2) 社会参加と還元の「学内パネル展示」：シカゴ日系人定住社会（Japanese American Service Committee in Chicago）と当大学の図書館との協賛でパネル展「Winning the Peace：平和への架け橋」を実施。戦時中の日系陸軍語学兵（MIS）の15枚の写真と解説で構成されたパネル展示で、学習者はそのポスター製作に加わりタイトルの和訳を担当。二項対立（勝者と敗者、加害者と被害者等）で表現されがちな戦争をテーマに、これまでの内容学習の知識を結集し、展示の主旨や目的を考え、言語の含蓄や多義性を踏まえての作業。学習者自身の日本語能力が日系コミュニティに還元されるという自身の役割も再認識する。
- (3) 日系文芸作品に見る「海を渡った日本語」：『歌集ミシガン湖畔』（1960年：戦中の日系収容から戦後のシカゴ転住を詠った短歌集）の中から短歌を数篇読み、シカゴ在住の歌人をゲストに招いて学習者が短歌を詠む。また永井荷風の『あめりか物語』（1908年）の短編「シカゴの二日」やアメリカ初のストーリーマングと呼ばれる木山ヘンリー義喬の『漫画四人書生』（1931年）を使い、一世や日系人の時代と空間を超えた日本語に触れることで、現在の多様化する日本語話者の中で学習者自身の日本を見つめ直す。

講演ではシカゴ日系社会と広島との関係にも触れ（例：写真家・詩人ジュン フジタ）、地域社会のリソースを日本語学習に取り入れることの重要性と意義にも触れた。

◎第13回大会（平成26年10月2日）

○研究発表

【口頭発表】

久保 琢也（博士課程後期3年）

カクチケル語 VOS 語順の産出メカニズム

－談話的卓立性を手がかりに－

上野 美香（博士課程後期1年）

インドネシアの中等教育における日本語教育の現状

－西スマトラ州の事例を中心に－

帖佐 幸樹（博士課程前期2年）

「ひとまとまり性」から「限界性」へ

－日本語動詞アスペクト研究における完成相（スル形）の基本的意味を捉えなおす－

【ポスター発表】

李 種恩（博士課程前期2年）

韓国人日本語学習者の場所を表す助詞「に」と「で」の使い分けの状況（1）

—学習期間による比較—

稲吉 真子（博士課程前期2年）・岡崎 渉（博士課程後期3年）・蘇 振軍（博士課程前期2年）・

谷口 愛保（博士課程前期2年）

日本語学習者による丁寧体否定形の使い分け

—「ません」と「ないです」—

葉 夢珂（博士課程前期1年）・林 宗緯（博士課程前期1年）・李 雪寧（博士課程前期1年）

日本語会話テキストにおけるあいづちについて

ラウラ ロドリゴ（博士課程後期2年）

関係節の産出における有生性の効果：スペイン語と日本語の比較研究

◎第14回大会（平成27年1月8日）

○講演

コミュニケーション環境設計としてのタスク・デザイン

— action research の再考と第二言語教育学 —

百済 正和 先生（英国：カーディフ大学）

○研究発表

【口頭発表】

イ ジェヒョン（博士課程後期1年）

日韓対照的視点によるアスペクト表現の研究

—完成相と継続相の使い分けを中心に—

張 麗（博士課程後期1年）

JFL 中国人日本語学習者の依頼発話行為におけるヘッジの使用

—学習段階別の特徴を中心に—

ジャ ブルブル（博士課程前期2年）

ヒンディー語の対成人発話・対幼児発話におけるオノマトペの出現状況

2014年度（平成26年度）日本語教育学講座 歳時記

2014年（平成26年）

- 4月3日 入学式
4日 新入生ガイダンス（学部・大学院）
8日 在学生前期ガイダンス（学部1～4年生・過年度生）
12日 新入生オリエンテーション行事（於：ひろしま国際プラザ）
6月5日 第12回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育学研究会
犬飼康弘先生講演会
20日 近松暢子先生特別講演会
7月24日 修士論文中間発表会
31日 卒業論文中間発表会
8月1～3日 迫田久美子先生（国立国語研究所・教授）集中講義
3日 就職・進学ガイダンス
講師：廣田周子氏（文化外国語専門学校 1991年卒）
露口雄策氏（兵庫県立兵庫高等学校 2011年卒）
窪田有希子氏（住友林業 2011年卒）
堀内麻里子氏（広島県警察本部 2011年卒）
7～11日 高山善行先生（福井大学・教授）集中講義
7～8日 オープンキャンパス
25～28日 難波康治先生（大阪大学・准教授）集中講義
9月10～11日 大学院教育学研究科（博士課程前期）入学試験（一般選抜・社会人特別選抜）
10月1日 金愛蘭講師着任
在学生後期ガイダンス（学部1, 2年生）
2日 第13回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育学研究会
3日 在学生後期ガイダンス（学部3, 4年生・過年度生）
11月20～21日 AO 選抜（総合評価方式・フェニックス方式）

2015年（平成27年）

- 1月8日 第14回広島大学日本語教育学講座 言語・文化・教育学研究会
百済正和先生講演会
2月12～13日 大学院教育学研究科入学試験
博士課程前期（一般選抜第二次・社会人特別選抜第二次・外国人留学生特別選抜）
博士課程後期（一般選抜・社会人特別選抜・外国人留学生特別選抜）
12日 修士論文審査会
16日 卒業論文発表会
16～19日 小河原義朗先生（北海道大学・准教授）集中講義
22～24日 山東功先生（大阪府立大学・教授）集中講義
25～26日 広島大学一般入試（前期日程）
3月23日 学位記授与式
31日 酒井教授、高橋助教辞職

日本語教育学講座 教職員名簿

2014年度（平成26年度）

50音順・敬称省略

講座主任	畑佐 由紀子				
教 授	倉地 暁美	酒井 弘	白川 博之	中村 春作	
	西原 大輔	畑佐由紀子	松見 法男	柳澤 浩哉	
准 教 授	永田 良太	西村 大志	渡部 倫子		
講 師	金 愛蘭*				
助 教	高橋恵利子				
事務補佐員	山田 典子				

*2014年度後期より当講座所属。

非常勤講師授業科目等

<学部>

日本語の変遷	高山 善行 先生（福井大学・教授）
日本語学習とマルチメディア	難波 康治 先生（大阪大学・准教授）
日本語の音声と発音	小河原義朗 先生（北海道大学・准教授）
日本文化研究	山東 功 先生（大阪府立大学・教授）

<大学院>

対照言語学特講Ⅱ	深見 兼孝 先生（広島大学・准教授）
対照言語学演習Ⅱ	深見 兼孝 先生（広島大学・准教授）
日本語教育方法学特講Ⅰ	迫田久美子 先生（国立国語研究所・教授）

2014年度（平成26年度）論文題目一覧 （学生番号順）

博士論文

氏 名	指導教員 (主査)	称 号	論 文 題 目
松島 弘枝	松見 法男	博士（教育学）	韓国人日本語学習者における日本語漢字単語の処理過程 －漢字と語彙の習熟度、学習環境の違いに着目して－
陳 嫻如	白川 博之	博士（教育学）	指示詞の使用と省略可能性に関する日中対照研究 －裸の名詞の解釈を手がかりに－
小口悠紀子	畑佐由紀子	博士（教育学）	日本語学習者の主題習得に関する研究
松原 愛	松見 法男	博士（教育学）	中国語を母語とする日本語学習者の日本語文の記憶における分散効果 －完全処理仮説の実験的検討－

修士論文

氏 名	指導教員	論 文 題 目
安光 奏美	渡部 倫子	シンガポール在住 CLD 児の読解力に関わる要因 －母語保持努力に着目して－
田村 彩香	酒井 弘	程度性を含む形容詞の意味処理過程に関する研究
菅井 陽子	倉地 暁美	外国人児童の「反周辺化」に関する試み －中国人集住地域における小規模校の事例研究－
今里 葵	畑佐由紀子	日本語学習者がフィードバックから受ける効果 －他者が受けたりキャストからの影響に着目して－
董 艶偉	畑佐由紀子	同形類義語の習得における困難点 －中国人初級・中級・上級学習者を対象として－
川元 志織	渡部 倫子	非漢字圏出身の学習者のための漢字語彙学習ストラテジー尺度の開発にむけて
稲吉 真子	白川 博之	とりたて詞「も」に関する研究 －上級日本語学習者の使用実態に基づいた考察－
AININ SHOFIAWATI	酒井 弘	漢語系派生語の処理過程 －語頭文字及び語基の効果を手がかりに－
蘇 振軍	畑佐由紀子	日本語の書き言葉における定式表現についての基礎研究 －コーパス言語学の観点から－
李 種恩	柳澤 浩哉	登場人物の思考傾向を表現から探る －『それから』と『三四郎』を対象にして－
谷口 愛保	畑佐由紀子	教示とタスクの認知的負荷が習熟度の異なる日本語学習者の発話に及ぼす影響 －複雑さ・正確さ・流暢さに着目して－
叶 子	松見 法男	第二言語としての日本語の文章音読における作動記憶の役割 －音読時の教示を操作した実験的検討－

JHA BULBUL	酒井 弘	幼児の初期言語習得における音象徴性の効果 ーヒンディー語児・日本語児及び養育者の発話を手がかりにー
曹 棟君	松見 法男	視覚・聴覚呈示の差異が中国人中級日本語学習者の日本語オノマト ペのイメージに及ぼす影響
帖佐 幸樹	白川 博之	動詞完成相のアスペクト的意味 ー目前の状況の捉え方を糸口にてー
朱 洪瑩	松見 法男	聴覚呈示を用いた双方向の口頭翻訳課題における日本語漢字単語の 処理過程 ー中国語を母語とする上級日本語学習者を対象としてー

卒業論文

氏 名	指導教員	論 文 題 目
花園 美都	酒井 弘	同意を表すあいづち表現の考察 ー鹿児島方言「だからよ」と韓国語ソウル方言「geureonikka」の 比較を中心にー
藤岡 夏生	柳澤 浩哉	『イノセンス』研究 ーロボットと人間の境界線ー
三浦 千佳	畑佐由紀子	留学生政策の評価と今後の課題 ー広島大学日本語教育系コースの学生を対象とした意識調査を通 してー
眞鍋 絵里	柳澤 浩哉	小山田浩子が描く作品世界
熊本 悠子	酒井 弘	「ら抜き言葉」の方言差 ー佐賀方言話者と東京方言話者の比較を通してー
橋本 将平	柳澤 浩哉	日本語版カタログと英語版カタログの表現の比較 ー海外の高級自動車を事例にてー
大田 夕紀	永田 良太	会話における終結ストラテジーの使用実態 ー終結に対する会話参加者の意図が異なる場合ー
甫木元恵美	松見 法男	日本語学習者の文章の記憶と理解におけるリスニング黙読とリスニ ング音読の効果 ー作動記憶容量の観点からー
河野 詠二	渡部 倫子	ベトナム国内の日本語専攻大学生の日本語学習動機づけ
栗田 夏紀	白川 博之	抽象対象を含む授受動詞文
西村 美樹	白川 博之	「やさしい日本語」における助詞使用 ー助詞はやさしさにどう影響するのかー
藤田 恭兵	松見 法男	中国語を母語とする日本語学習者の日本語直喩表現の理解における 被喩辞と喩辞の相互関係 ーカテゴリー的意味と情緒・感覚的意味の観点からー
船曳 翼	西村 大志	メディアにおける地方イメージの消費
服部 司	西原 大輔	三島由紀夫『太陽と鉄』論 ー「見る」「見られる」ということー

森重 里保	渡部 倫子	外国人児童生徒のための JSL 対話型アセスメント DLA <話す>データにおける使用語彙の特徴 ー児童のルーツと在籍学級による相違ー
和氣 瑞紀	西原 大輔	武道文化における伝統研究 ー甲野善紀の古武術と嘉納治五郎の現代武道ー
萬谷 文華	西原 大輔	大和和紀の漫画から見るフェミニズム論
山本 健太	畑佐由紀子	日本語音声指導における拍感覚を養う訓練方法の検討 ー英語・中国語母語話者を対象としてー
(非公開)	西原 大輔	江國香織の孤独観
野崎 愛絵	畑佐由紀子	姫路市の地域日本語教育 ー行政による支援の在り方を探るー
入江りさ子	松見 法男	授業におけるシャドーイング練習と記憶を伴う書き取り練習が児童の「書く力」の育成に及ぼす影響 ー小学4年生の年少日本語学習者を対象としてー
赤木 祥子	西村 大志	創られる聖地 ー宗教の世俗化とパワースポットー
勝丸 大規	中村 春作	『徒然草』における「自然」 ー兼好の批評意識という観点からー
鳥居 史高	倉地 曉美	ボランティア教師と学習者の関係に関する一考察 ー地域の日本語教室における事例研究ー
元木 崇史	永田 良太	ツイッターにおける表現の特徴 ー性差に着目してー
細川 勝広	西村 大志	『暴走族』という社会問題の構築 ー広島・胡子講暴挙事件にみるー
石田 真穂	中村 春作	『夢ノ代』における山片蟠桃の思想 ー西洋科学の影響を受けた町人儒者ー
岡本しおり	西村 大志	メガネ萌えにみるオタクの変容
岡島 由実	松見 法男	日本語母語話者の「ほめ」に対する返答と性格との関係性 ー謙遜表現の使用に着目してー
山本 大地	西村 大志	女性の通過儀礼 ーゴシック・ロリータに焦点を当ててー
浦越 未来	松見 法男	授業におけるシャドーイング基礎・応用練習が児童の「話す力」の育成に及ぼす影響 ー小学4年生の年少日本語学習者を対象としてー
岡田 樹	松見 法男	中国語を母語とする日本語学習者の口頭産出における文末イントネーションの上昇／非上昇に及ぼす自己再認能力の影響
岩井 実里	渡部 倫子	CLD 児童を対象とした読書活動の課題 ー多読授業の導入に向けてー
伊藤 未咲	柳澤 浩哉	台詞と字幕の違い ー字幕翻訳にみられる特徴とその背景ー
島田 真実	酒井 弘	日本語構造的曖昧文における解釈選好性の違い ー後置詞句が及ぼす影響ー
橋本 浩樹	白川 博之	重言の研究 ー許容される表現と許容されない表現とに分かれる条件ー

執筆者紹介

畑佐由紀子	(日本語教育学講座 教授)	
松見 法男	(日本語教育学講座 教授)	
柳澤 浩哉	(日本語教育学講座 教授)	
永田 良太	(日本語教育学講座 准教授)	
高橋恵利子	(日本語教育学講座 助教)	
費 暁東	(日本語教育学講座 特任助教)	
佐藤 智照	(独立行政法人国際交流基金日本語国際センター 専任講師)	
松島 弘枝	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
木村 典子	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
当銘 盛之	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
伊藤 亜希	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
于 君	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
韓 暁	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
徐 芳芳	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
黒田 亮子	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程後期大学院生)
李 種恩	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
叶 子	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
谷口 愛保	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
田村 彩香	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
石川 裕大	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
徐 婕	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
趙 静	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
西本淳一郎	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
葉 夢珂	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
吉村 瑞希	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
李 雪寧	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)
若泉 英里	(言語文化教育学専攻日本語教育学専修	博士課程前期大学院生)

第25号 紀要編集委員会

柳澤 浩哉・高橋恵利子

編集後記

本講座は、昨年10月新任教員として金愛蘭（キム・エラン）先生をお迎えした。ご専門は語彙・意味論・コーパス言語学で、外来語などを中心に研究を続けておられる。若い力で大いに講座を刺激していただきたい。

その一方で、この春、我々はお二人の先生とお別れをしなければならない。酒井弘教授と高橋恵利子助教である。酒井先生は早稲田大学理工学院に、高橋先生は目白大学国際学部（准教授）に転出される。高橋先生は研究者としての本格キャリアをスタートさせる。今後のご活躍をお祈りしたい。長年講座を支えてくださった酒井先生については、出来ることなら講座紀要に特別ページを組みたいが、慣例によって転出される先生には特別ページを割くことができない。この場所を借りて先生のご貢献を簡単に紹介し、お礼の気持ちを表したい。

酒井先生は20年前の1995年4月に本講座に着任され、現在までに学部生43名、大学院では博士課程前期33名、同後期16名を主任指導教員として指導された（この内留学生は28名）。周知のようにご専門は対照言語学と言語の脳科学であり、多くの大型プロジェクトのリーダーを務めてこられた。リーダーを務められた研究課題を二つだけ紹介すると：

「言語の多様性と認知神経システムの可変性—東アジア言語の比較を通した解明—」（学術振興会科学研究費基盤研究（A））

「文産出時の統語構造構築に関わる脳機能の解明」（文部科学省科学研究費特定領域研究「脳の高次機能学」）

酒井先生でなければ不可能な高度かつ複合的なご研究である。

温厚なお人柄と高い能力を備えた先生は、講座内の業務だけでなく、教育研究科の業務や全学的な大型プロジェクトでもご活躍をいただいた。長年のご貢献に心よりお礼を申し上げます。

酒井先生は座っておられるだけで場を和ませるオーラをお持ちである。お別れすることは本当に残念であるが、早稲田大学での益々のご活躍をお祈りしたい。最後に、先生からいただいたお言葉を引用させていただく。

広島大学に在籍した20年間は、教員、研究員、大学院生、学部生のみなさんとともに学び、新しい研究分野に挑戦し、成長させていただいた日々でした。ただただ感謝の気持ちでいっぱいです。

（文責：柳澤）